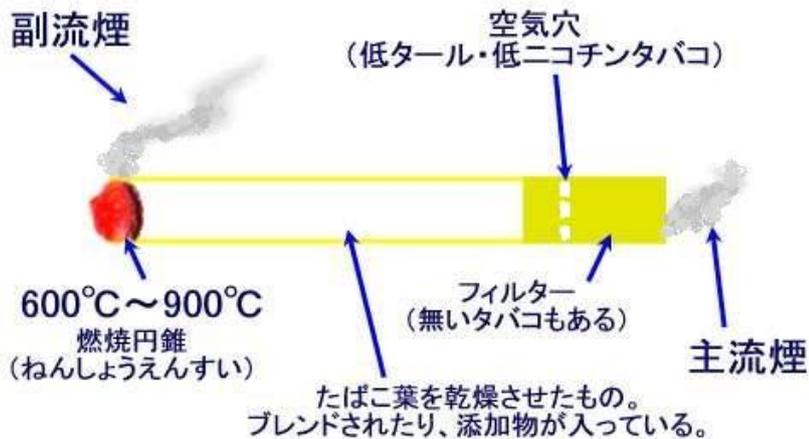


週刊 タバコの正体

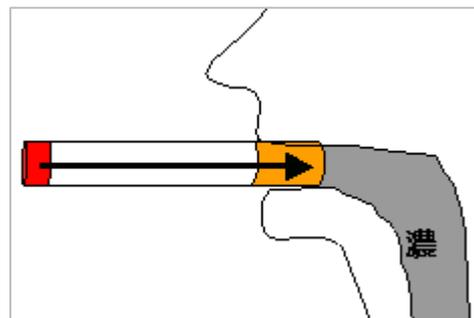
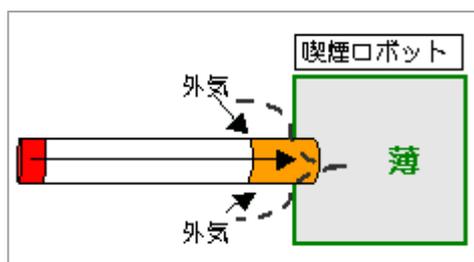
前回、喫煙者自身が吸い込む煙(主流煙)より、まわりの人が吸わされる煙(副流煙)のほうが有害だという事を紹介しました。喫煙者が思いっきり吸い込む煙より、タバコの先から頼りなく立ち上る煙のほうが有害だなんて、ちょっと不思議で信じがたい気がします。



でも、左の図を見てください。主流煙はフィルターを通過しますが、副流煙は火元から直接でていきますよね。つまり、フィルターが有害物をかなり除去してくれているわけです。

そして、喫煙者が吸い込むとタバコの先の火が大きく赤くなりますが、吸いこんでいない時の火は小さく、くすぶっている感じです。つまり、副流煙は不完全燃焼気味の煙なので有害物質が多くでるのです。

ところで、上の図を見るとフィルターに空気穴が付いていますよね。実物を手にとって見る事が出来ない君たちは知らないと思いますが、ほとんどのタバコのフィルターにはよく見ないとわからないぐらいの小さい穴があいています。何のためだかわかりますか。



タバコのパッケージには、「タール1mg・ニコチン0.1mg」などと表示しています。これはどうやって測っているかというと、左図のように喫煙ロボット(機械)がフィルターの穴をふさがずに一定量を吸い込んだ煙に含まれるタールとニコチンの量を計測しているのです。ということは空気穴から入ってくる外気で煙はかなり薄まりますよね。

そうなんです、この穴は有害物の含有量を低くするための細工なのですが、実際は右図のように喫煙者はフィルターを奥までくわえて吸い込むので、表示されているよりはるかに多い有害物が体内に入ってきます。

なんか、タバコって「ずるいな」って思いませんか。

産業デザイン科 奥田 恭久